

目的：18から19世紀にかけての産業革命を経て、他に類のない工業国となったイギリスは、19世紀末から20世紀初頭にかけてはしかし、大不況期をむかえ、経済的には低迷していた時期ととらえられる。他方、この時代は、芸術的な面ではアール・ヌーボーと呼ばれる装飾様式が主流となっていた。本研究は女子服の素材に着目し、それらとの関連を検討することを目的とする。

方法：資料として、当時発行されていた雑誌から、ファッションに関する記事や図版を主に用いた。また、その他写真資料、染織品に関する文献、図版等を用いた。

結果：用途によって、また季節によっても、用いられる素材は異なってくる。が、次のように大きく二つにとらえることができるのではないかと考える。主にコートなどの外出着や、秋から冬にかけての家庭着などには様々な織り方の毛織物が多く用いられていた。また、色彩的にも落ち着いた印象の無地、あるいはそれに近いものが用いられていた。また、そのようなものは比較的装飾も少なく、シンプルなシルエットとなっている。一方、春・夏用のものや、それ以外でもあらたまったときのものは、シルエットにSカーブラインが見られ、装飾も多く施されている。素材は、絹や綿で軽やかに織られたものが多かった。色彩的には淡い色調や白が目立ち、花をモチーフにしたプリント地も用いられていた。前者の実用的なシルエット、素材からは、社会的な背景が関与しているとも考えることもできる。また、後者はシルエットだけでなく素材も明らかにアール・ヌーボーの影響を受けていると思われる。